中世女流日記にみる人間観

――『右京大夫集』・『とはずがたり』について――

沼波政保

一

家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ、これは、ゆめゆめさにはあらず。ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることどもの、あるをりをり、ふと心におぼえしを、思ひ出でらるるままに、我が目ひとつに見むとて書きおくなり。

われならでたれかあはれと水茎の跡もし末の世に伝はらば（一）

『建礼門院右京大夫集』[1]冒頭の序にあたる一文である。もちろんこれは『右京大夫集』がまとめられる最後の段階で執筆されたものであるが、ここにこの集の執筆理由が語られている。すなわち、これは歌人の家集といったものではな

いと断った上で、作者右京大夫の人生は「あはれにも、かなし」いものであったと述べ、それは「忘れがたくおぼゆる」ことであり、その折々に心に思われたことをおのずから書き置いたものであるという。それは「我が目ひとつに見む」という目的であった。そして和歌では、この集を見て「あはれ」だと思うのは自分だけであって、たとえこの集が後世に残ったとしても誰も「あはれ」だとは見てくれないだろう、しかし、所詮「我が目ひとつに見む」と思って記したものなのだからそれでいいのだ、という思いを述べている。

この冒頭部分に照応する一文が、跋ともいうべき末尾に語られている。

かへすがへす憂きよりほかの思ひ出でなき身ながら、年はつもりて、いたづらに明かし暮すほどに、思ひ出でらるることどもを、すこしずつ書きつけたるなり。おのづから、人の「さることや」などいふには、いたく思ふままのこと、かはゆくもおぼえて、少々をぞ書きて見せし。これはただ、我が目ひとつに見むとて、書きつけたるを、後に見て、

くだきける思ひのほどのかなしさもかきあつめてぞさらに知らるる（三五七）

ここでも、冒頭と同じような思いが語られている。すなわち、みずからの人生を「憂きよりほかの思ひ出でなき身」と捉え、人生の大半を「いたづらに」明かし暮したとする。そしてそれを少しずつ書き記したものだと言う。時には他の人に一部分を見せたことはあるが、これはどこまでも「我が目ひとつに見む」と思って記したものであると言う。そして和歌では、書き付けたものを見ると心が砕き散るほどの悲しさの人生をあらためて知ることだと言う。

この序と跋で注目すべきことは、二点ある。一つは、自らの人生を「あはれにも、かなしくも」（序）あり、「憂きよ

りほかの思ひ出でなき」（跋）ものであったと捉えていることである。しかし、作者の人生がそのような辛いことばかりであったのではもちろんない。『右京大夫集』の中にも、例えば建礼門院のもとへ宮仕えに上がった時の、見るもの聞くものすべてが感動の対象であり、高倉天皇と建礼門院の月日に例えるほどに照り輝くほどの美しさに感動するなど、初々しい中にも宮仕えの嬉しさを語る場面がある。また、平資盛との恋愛も、たしかに辛く苦しいこともあったが、それは恋愛に付きもののことであって、そのような恋愛に在ることが人生そのものの辛さ、悲しさではない。それなのに、作者は「憂きよりほかの思ひ出でなき」（跋）人生であったと言う。

それは、作者にとっては、資盛が一門の人々と共に都落ちして行き、やがて壇の浦で入水して命を閉じて以後こそが、彼女の人生そのものであったからである。つまり作者にとって、資盛と別れて以後晩年までのことが人生のすべてであり、それは「あはれにも、かなしくも」（序）あり、「憂きよりほかの思ひ出でなき」（跋）ものであったのである。このことは、資盛と死別してからも作者の心の中には晩年までずっと資盛が存在したことを物語っているのである。

ところで、この序と跋では、「思ひ出でらるるままに」（序）、「思ひ出でらるることどもを」（跋）書き記したという。つまり、共に「思ひ出でらるる」と言っていることから、事があったその時に記したのではなく、後に自然と思い出されて書き記したのである。ということは、そこにどれほどの時間差があったかはわからないが、少なくとも事があったその時に記したのではなく、後に思い出して書き付けたということである。そしてその、自然と思い出されたことは「あはれにも、かなしくも」（序）あり、「憂きよりほかの思ひ出でなき」（跋）ものであった。ということは、その自然と思い出されたことは資盛とのことであったのである。

すなわち、作者の人生は、資盛を失った二十八歳ごろから晩年までがすべてであり、それはこの世にはもはやいない資盛を想って生きたものであったのである。

作者は、資盛死後、出家するのでもなく、他の男性の庇護を受けることもしなかった。たしかに、都落ちにあたって資盛が「道の光もかならず思ひやれ」（二〇四）、「後の世をばかならず思ひやれ」（二二七）と言い残したこともあり、また資盛の菩提を弔うのは「身一つのことに思ひなされ」（同上）た結果、彼の菩提を弔うことに懸命になっている。しかし、出家し尼となって亡き恋人の後世を祈る生き方はしていない。時には死んでしまいたいとか尼になりたいなどと思うこともあったが、結局は出家することなく晩年まで生きたのである。なぜ出家しなかったのか。それは出家して尼になることは女性の身であることを捨てることになるからである。出家の世界には世俗の男女の別はない。それは『源氏物語』における藤壺の出家をみてもわかることである。藤壺は、自分への源氏の男女の愛をとどめ、しかも源氏が我が子冷泉院の後見として存在し続けることを願って、考え抜いた末に出家したのであった。翻って、『右京大夫集』の作者にとって、尼となって恋人資盛の後世を祈ることは、資盛との恋愛関係がなくなることを意味する。作者はその道を選ばず、どこまでも彼との恋愛関係を継続すべく、出家しなかったのである。つまり、たとえ恋人資盛がこの世に存在しなくとも、作者はどこまでも資盛と共に生きようとしたのである。

『右京大夫集』の最後に、この作品の成立事情を記す記事がある。

老ののち、民部卿定家の、歌あつむることありとて、「書き置きたる物や」とたづねられたるだにも、人かずに思ひ出でていはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、「『いづれの名を』とか思ふ」ととはれたる、思ひやり

のいみじうおぼえて、なほただ、へだてはてにし昔のことの忘られがたければ、「その世のままに」など申すとて、

言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ（三五八）

かへし　　民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世に残さなむ（三五九）

とありしなむ、うれしくおぼえし。

作者が七十歳は過ぎたであろう晩年に、『新勅撰集』編纂の命を受けた定家から書き置いた和歌はないかと尋ねてきた。そして定家が作者に「いづれの名を」用いたいかと問うたのに対して、作者は「へだてはてにし昔のことの忘」れられなかったので「その世のままに」と答えたと言う。和歌においても、もし自分の和歌が後世に残るならば忘れがたく懐かしい昔の名をとどめたいと言う。そして『新勅撰集』には「建礼門院右京大夫」の名で作者の和歌が入集している。つまり、彼女にとっては、資盛死後に宮仕えに上がった時の女房名ではなく、建礼門院徳子に仕えた時、すなわち資盛と愛し合った時の名が、忘れがたい「へだてはてにし昔」の名であり、「しのばしき昔の名」であったのである。このことは、作者が最晩年に至ってまでも資盛のことを忘れることができず、ずうっと想い続けていたことを物語るものであり、まさに彼女の人生が資盛と共にあったことを如実に表しているのである。

さて、序と跋で注目すべき二つめは、共に「我が目ひとつに見むとて」書き綴ったと語っていることである。この言葉は、みずからの人生を確かに生きたことを、みずからの心の内で確認したいという思いを語るものである。しかもそ

の人生は資盛を想ってのものであった。つまり、作者にとっての人生は、資盛死後も彼と共に生きたものであったのであり、それが人生のすべてであった。すなわち、その生死とは関係なく、資盛と共に生きたみずからの人生を、みずから確認したいために『右京大夫集』を書き綴ったのである。それはまさに生きた証しであった。

このようにみずからの人生を捉え、みずからの心の内に確認することは、今まで生きてきたみずからの人生を肯定しているものといえよう。また、そのように生きた我が身を肯定的に評価しているのである。たしかにその人生は、「あはれにも、かなし」いものであったが、同時にそれは「忘れがたくおぼゆる」ものであった。「あはれにも、かなし」いものではあったが、彼女の人生は間違いなく資盛を変わることなく愛し続けたものであった。そういう我が人生、またそのように生きた我が身を肯定し、誇らしくも思い、みずからに確認しようとしたのが、『右京大夫集』なのである。

二

『とはずがたり』の作者、後深草院二条は、二歳で母を失い、その後は十五歳で死別するまで父に育てられたが、幼い時から院にかわいがられて育ち、院も新枕の相手であった大納言典侍の子である作者を「あが子」と呼ぶほどにかわいがっていた。しかし作者十四歳の時、里に下がっていた作者は院の来訪を受け、むりやりに契りを結ばされてしまう。それ以後、作者は、以前から交際があった雪の曙をはじめ、有明の月、亀山院、近衛の大殿といった男性との交渉を持った。それも、後深草院の寵愛を受けつつのことであり、時には複数の男性との同時進行も含めたものであった。華やか

なと言うべきか、尋常ではない男性遍歴であった。そして時には院以外の男性との子を出産することもあった。

そのような男性遍歴について、作者は一見、罪の意識を感じているようではあるが、その実は、院に知られることを恐れる思いが一番の心配であった。院の歪んだ性向もあって、時には院のさしがねによって他の男性と結ばされることもあり、作者はこれらの男性の中で翻弄されている感もあり、そのような身に対して同情できる面もあるが、それぞれの男性に対して院を最初に拒んだような強い拒否は示さず、また、暁に去っていく男性の後姿をしみじみと眺めたり、愛情を感じたりしていることを考えると、やはり作者自身の性格も大きく関わっていることは否定できないだろう。

しかし作者は、院以外の男性と結ばれる結果になったことについて、例えば雪の曙との新枕を交わしたことについて「例の心弱さは、否とも言ひ強り得でゐたれば」（巻一）と言っているように、「例の心弱さ」という言葉をしばしば用い、やむを得なかったのだということを言外に匂わせている。すなわち、自分の意志が弱いばかりにこのような結果になってしまったと自らの責任で招いたことであると言いつつも、そのように語ることによって、男性の身勝手な思いの中で、やむをえず翻弄される自己を演出しているのである。

そのような愛欲に溺れたような宮廷生活も、後深草院の后である東二条院の度々の嫉妬によって終わりを告げ、結局は院に追われたかたちで御所を去る。

その後作者は、幼い頃に「西行が修行の記」を見て以来の念願通りに出家して尼となり、憧れてきた行脚の旅に赴く。東国へ旅立って鎌倉に滞在し、善光寺にも参詣し、やがて帰京の途中に再度熱田社に参詣、帰京後は奈良へ赴く。しかし、この旅は、実際は廻国修行の旅というには程遠いものであったらしい。それは、先述した「西行が修行の記」を九

歳の折にみた記述によれば、

九つの年にや、西行が修行の記といふ絵を見しに、片方に深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかかるに眺むるとて、

風吹けば花の白浪岩越えて渡りわづらふ山川の水

と詠みたるを描きたるを見しより、うらやましく、難行苦行は叶はずとも、われも世を捨てて足にまかせて行きつつ、花の下露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みも述べて、かかる修行の記を書き記して、なからん後の形見にもせばやと思ひしを（巻一）

とあり、「難行苦行」の仏道修行というよりは風流の勝った旅であったようである。

さて、作者は奈良方面に赴いた帰途、岩清水八幡宮に参詣し、思いがけず後深草院と再会する。院は昔のことを話され、形見にと小袖三領をくださった。作者は、自分を御所から追放した院に対して恨みつらみはあったはずであるが、「年月は（院のことを）心の中に忘るる御事はなかりしか」と言い、また、小袖をくださった院のお心を思うと、

来し方行く末の事も、来ん世の闇も、よろづ思ひ忘れて、悲しさもあはれさも、何と申しやる方なき

状態であったと言う。そして立って行かれる院の残り香も「なつかしく匂」い、「夢を夢見る心地し」て、「今一度ものどかなる御ついでもや」とは思ったが、それも憚られてよそながらお姿をもう一度拝見する。院のお姿を拝見していると、昨夜様々承った時の「いはけなかりし世の事まで数々仰せありつるさへ、さながら耳の底に」残り、院の面影は涙にかすむことであったと言う。都へ戻る道中でも、院と再会したうれしさは、「わが魂はさながら御山にとどまりぬる

心地」であった。

つまり、この院との再会の場面では、御所を追放されたことに対する作者の院への恨みつらみは消え、ただただ、院へのなつかしさ、また再会できたことのうれしさばかりであり、院と別れた後も恋しさが募っていることがわかるのである。

その後、作者は熱田社や伊勢神宮を訪れ、伊勢にはしばらく逗留もするが、その間も院は度々使いを遣わして作者を誘う。そして伏見の御所で、再び院とお会いする。ここでは、岩清水での再会時にも増して院は思い出を多く語る。それを承っていると心を深く動かされる作者であった。そして別れた後も院からは慰問の使いが来る。これについて作者は「いかでかうれしからざらん」と言い、続けて

いはんや、まことしくおぼしめし寄りける御心の色、人知るべきことならぬさへ、置き所なくおぼえ侍りし。

と語る。そしてこの院のお気持ちは作者にとって「何となく忘れがたくぞ侍る」（以上、巻四）ものとなったのである。

その後も、二見・厳島・足摺岬・白峰・松山・和知と旅は続くが、やがて御深草院がご病気と聞く。作者はいてもたってもおられず今一度お会いしたいと思うがそれも叶わず、あちこちの寺社にご病気平癒を祈願するが、ついに崩御の知らせを聞く。

思ひまうけたる心地ながら、今はと聞き果て参らせぬる心地は、かこつ方なく、悲しさもあはれさも、思ひやる方なくて

御所へ駆けつけ、誰もいない庭に一人居て昔を思っていると、折々の院の面影が今眼前にあるような気がして、何とも

言いようがなく悲しい。

やがて葬送の列が出発する。作者は「履きたりし物もいづ方へか行きぬらん、裸足にて走り下りたるままにて」葬列の後を追う。

ここよりや止る止ると思へども、立ち帰るべき心地もせねば、次第に参るほどに、物は履かず、足は痛くて、やはらづつ行くほどに、皆人には追ひ遅れぬ。……（中略）……空しく帰らんことの悲しさに、泣く泣く一人なほ参るほどに、夜の明けし程にや、事果てて、空しき煙の末ばかりを見参らせし心の中、今まで世に永らふるべしとや思ひけん。（以上、巻五）

泣きながら裸足で院の葬列を追う場面である。列に遅れながら懸命に後を追う先に火葬の煙を見上げるところなど、多分に演出の感なきにしもあらずだが、作者の院に対する思いは充分に表現されている。

すなわち、あれほど華やかなというべきか、奔放なというべきか、多くの男性遍歴を重ねて来た作者は、後深草院によって御所を追われた後は尼となって諸国を旅して歩いたわけだが、御所を追われたことに関して院への恨みは当然あったはずである。事実、「かくて世に経る恨み」（巻四）という表現も見られる。しかし、岩清水八幡宮で院に再会した作者には、再会した喜びと院へのなつかしさ、さらには再度の再会の際にも同様の気持ちが湧いたのであって、そこには恨みはほとんど姿を消している。このことは、多くの男性との交際はあったが、作者にとっては、院こそが片時も忘れることのない存在であり、心から愛し、頼みに思っていた存在であったことを物語っているのである。その証左が、院のご病気に続く葬送の場面での、悲しみのあまり体裁もかまわず取り乱した様子でひたすら葬列を追うという行動であ

る。つまり、作者は院と再会するまでは気づかなかったが、再会、再度の再会、そして崩御によって、自分が今まで無意識のうちにも院を愛し、院を支えとして生きてきたことに始めて気づいたのである。しかし、気づいた時には、院はすでにこの世の人ではなかった。失ってみて初めてその存在の大きさに気づいたのである。考えてみれば、作者が御所を追放されて以後、かつて交渉のあった院以外の男性は、記事的に述べる若干の箇所を除いて、全くと言ってよいほど触れられていない。

やがて院の三回忌を迎えた後、作者は次のように語る。

見しうば玉の御面影も、現に思ひ合せられて、さても宿願の行く末いかがなり行かんとおぼつかなく、年月の心の信もさすが空しからずやと思ひ続けて、身の有様を一人思ひゐたるも飽かずおぼえ侍る上、修行の心ざしも、西行が修行の式、羨しくおぼえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、かやうのいたづら事を続け置き侍るこそ。後の形見とまでは、おぼえ侍らぬ。（巻五）

『とはずがたり』跋にあたる部分である。細かい解釈は今措くとして、ここで作者は、「身の有様を一人思ひゐたるも飽かずおぼえ侍る」と言い、「その思ひを空しくなさじばかりに」この『とはずがたり』を綴ったのだと言う。つまり、自分の今まで生きてきた人生を心中深くに沈潜させておくことはできない、また修行を思い立つに至ったことも無駄にしないために、綴ったのだと言うのである。すなわち、誰に問われるのでもなく、自ら語らずにはおれない思い、しかもその内容は、自らが修行へと向かうに至った事情、つまり、自分の歩いてきた人生そのものである。それは、五十歳を目前にして始めて気づいたところの、自分の人生が無意識のうちに後深草院を頼みにし、支えにしてきた人生で

あった。

しかし、そのような人生であったと気づいた今、その院ももうこの世におられない。これからは自分一人で歩いていかなければならないのである。そこで、これからの後半生を歩み出すにあたって、自分一人で歩んでいくためにも、今までの半生を自らの目で確認しておきたいと思ったのである。そしてその半生は、振り返ってみると、院によって支えられて生きてきた人生であった。しかも、その半生は反省後悔するものではなく、確かに自分の人生であったという思いがある。つまり、決して自分の人生を否定するのではなく、むしろそういう人生であったと、そのまま肯定的に捉えていることがうかがえるのである。そして、その半生を肯定的に捉え、確認することによって、これからの後半生を今度は一人で生きていこうとするのである。これからの後半生を前向きに生きていこうとする時、誰に語るのでもないが、問われずとも語らずにはおれない気持ち、それがこの『とはずがたり』執筆の動機であり、題名の所以なのである。『建礼門院右京大夫集』の「我が目ひとつに見むとて」と同じ意図であると言えよう。

すなわち、作者は、無意識のうちにも後深草院を支えにし、院とともにあった自らの半生を決して後悔すべきものとして否定していない。むしろそのように生きたということをそのまま捉えて確認しようとしているのである。

結

如上、『建礼門院右京大夫集』と『とはずがたり』について、共にみずからの人生を肯定的に捉えていることを考察

してきたが、この、みずからの人生を肯定的に捉えるということは、とりもなおさず肯定的に自己を捉えることであり、その根底には人間を肯定的に捉える姿勢をみることができるのである。すなわち、長い人生の中には様々な苦しいこと、辛いことも多く、時には失敗もあり、後悔することもあるのであるが、しかし、そのような中で懸命に生きているのが人間であり、そのように生きることを前向きに捉え、さらにはそのような生きてきたことに誇りさえもっているのである。それは自己を捉えるものであり、普遍的に人間を捉えたものではないが、しかしそれは間違いなく人間を肯定的に捉えようとするものである。

このような『建礼門院右京大夫集』と『とはずがたり』の人間観は、平安王朝時代の女流日記とは趣をことにしている。平安時代の女流日記は、『蜻蛉日記』や『更級日記』を例に挙げるまでもなく、我が身、わが人生を嘆いたり、後悔したりする趣のものである。それはそれで、一人の女性の人生における悩み、苦しみ、辛いことについての心裡が如実に表現され、文学性の高いものではあるが、みずからの人生を肯定的に捉えたものではない。この点、中世女流日記の特色の一つと言えよう。

『建礼門院右京大夫集』や『とはずがたり』は、人間観と言っても自らを捉えるものではあるが、なぜ、このように肯定的な人間観を持ち、みずからの人生を肯定的に捉えているのであろうか。

このような肯定的人間観については、『宇治拾遺物語』を中心にかつて考察したことがある。[2] そこでは、『宇治拾遺物語』及び『徒然草』・『平家物語』の人間観について言及した。今は詳細を述べず、結論だけを述べると、『宇治拾遺物語』は、人間のありのままのすがたに、時には驚き、時には感嘆し、時には苦笑しつつ、しかし決して非難したり批判

したりすることなく、人間をおおらかにみつめ、これが人間なのだと人間のすべてを認め、肯定している。このような『宇治拾遺物語』の人間観は、『徒然草』の、矛盾に満ちた人間性を認め、その人間性を肯定する立場に立って、「ひたふる」でない、精神的に自由な生き方を求めた考え方と非常によく似通っており、また『平家物語』は、無常の「ことはり」の前にまったく為す術もなく滅んでいった数限りない人間への暖かい同情・共感をもって語るが、これは『宇治拾遺物語』や『徒然草』の、人間性を積極的に肯定する人間観とはたしかに異なるが、その人間への暖かい眼差しという一点において、『宇治拾遺物語』や『徒然草』の人間観と共通している。そして、『徒然草』も『平家物語』も、その人間観は無常観を基盤として成り立ってきているのである。

今、『建礼門院右京大夫集』と『とはずがたり』の人間観は、肯定的なものであるとはいえ、『宇治拾遺物語』や『徒然草』のような積極的に人間性をすべて肯定するものではない。その意味においては『平家物語』のそれにやや近いと言えようか。しかし、また、我が人生を否定的に捉え反省や後悔の念で語るのではなく、例えば『とはずがたり』作者が奔放な男性遍歴を「例の心弱さ」のためとみずから語るところにもみられるように、諸々の出来事を人間の仕方がない面なのだとし、しかもそれを肯定的に捉えるところなどは、『宇治拾遺物語』や『徒然草』の人間観に近いとも言い得る。

ところで、『宇治拾遺物語』の人間観はどこから成り立ってきているのかは明らかではないが、『徒然草』及び『平家物語』の人間観が無常観から成り立ってきていることを考えると、『宇治拾遺物語』の作者も、兼好と同様な無常の認識を持ち、同じような思考過程を経て『徒然草』と同じような人間観を持つに至ったのではないかと推測するのである。

今、中世という時代を語ることはしないが、中世という時代背景を持つ中世文学は濃淡の差こそあれ、無常観を根底に持っている。そしてこのことは、中世の文学作品の人間観が無常観の上に成立していることを推測させるに十分である。

『建礼門院右京大夫集』の作者右京大夫も『とはずがたり』の作者二条も、中世という時代に生きた人であり、当然のことながら無常観を持っていたことは間違いない。とすれば、みずからの人生を肯定的に捉えていることに表れているこの二作品の人間観も、中世という時代の中にあって無常観を持ち、その無常観から導かれたものなのではないかと推測する次第である。

ともかくも、『建礼門院右京大夫集』と『とはずがたり』は、共にみずからの人生を、このように生きたのだという自負を持って語っており、そのようなみずからの人生を、みずから確認したい思いから綴られたものなのであり、そこには、肯定的人間観をみることができるのである。

注

(1) 『建礼門院右京大夫集』・『とはずがたり』共に、本文は新潮日本古典集成による。

(2) 「中世文学にみる人間観(一)――『宇治拾遺物語』について――」(『同朋文学』第二十八号・一九九八年六月)参照。